



2013日本自動車殿堂 歴史車

日本の自動車の歴史に優れた足跡を残した名車を選定し
日本自動車殿堂に登録して永く伝承します

Cars that blazed the trail in the history of Japanese automobiles are selected,
registered at the Hall of Fame and are to be widely conveyed to the next generation.

ホンダ N360

HONDA N360

ホンダ N360



ホンダ N360 の成功によって、本田技研工業は四輪メーカーとして躍進を果たした。その後 N360 の後継車であるライフが開発されるが、このライフの水冷エンジンがベースとなって、世界戦略車となるホンダシビックが開発され、ホンダの本格的な世界進出がスタートしたのである

ホンダ N360 (1967 年) 主要諸元

全長	2,995mm	型式	N360
全幅	1,295mm	駆動方式	FWD (FF)
全高	1,345mm	エンジン	空冷並列 2 気筒
ホイールベース	2,000mm	ボア×ストローク	62.5mm×57.5mm
トレッド 前	1,130mm	総排気量	354cc
後	1,105mm	圧縮比	8.5
車両重量	475Kg	最高出力	31ps / 8,500rpm
乗車定員	4 名	最大トルク	3.0kg・m / 5,500rpm
最高速度	115km/h	燃料消費率	28km/L
最小回転半径	4.4m	変速機	4 段コンスタントメッシュ
登坂能力	20°	価格	313,000 円
タイヤサイズ	5.20-10-2PR		

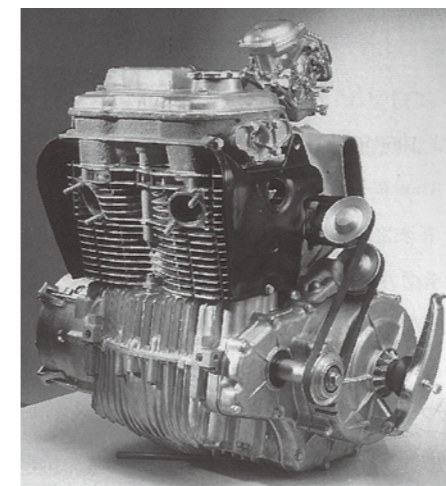


本田宗一郎社長(当時)が唱えた「あらゆる人々のための車」を具現化したホンダ N360AT。ホンダが独自に開発したオートマチックを搭載

二輪メーカーとしてスタートした本田技研工業は、次に四輪車市場にも進出をはかり、1963 年(昭和 38 年)に軽トラック T360 を発売、その翌年には 2 シーターのスポーツカー“ホンダ S500”を発売した。ホンダはこれらの個性的な車種の開発によって、順調に四輪メーカーとしても地歩を着実に固めていたが、量産できる車種の開発は、四輪部門でも必須であった。そこで日本の庶民の車として、急激な勢いで普及していた乗用軽自動車に着目し、ホンダ N360 の開発が進められることになるのである。開発に当たっては、エンジン排気量は 360cc、全長 3m、全幅 1.3m、という軽自動車の規格(当時)を考慮して、エンジンは小さくて効率の良いオートバイのエンジンレイアウトをベースとした。さらに大人 4 人が座れるスペースを最大限とするため、室内スペースを確保するのに有利な前輪駆動 (FF: フロントエンジン・フロントドライブ) 方式を採用することが決められた。当時 FF 方式は、技術的な課題もあり、採用されることが極めて少ない駆動方式であったが、開発責任者の中村良夫氏は、「軽の寸法の中で、最大限の効率性、スペースユーティリティを發揮させるには、前置きエンジン、前輪駆動しかなかった」と当時を回想している。

■注目のホンダ軽自動車誕生

1966 年(昭和 41 年)の晴海で催されたモーターショーで発表されたホンダ N360 は、ホンダによる初の乗用軽自動車として、大きな注目を集めた。4 サイクル OHC、2 気筒エンジンの最高出力は 31 馬力の高性能を誇り、室内スペースも広く、加えてトランク



ミッションやクラッチも一体型の非常にコンパクトなエンジンは、広い室内空間を可能とする設計であり、現代にも通じる優れた思想であった



“ホンダ N360 は先ず客室から設計をはじめました”と宣伝する N360 発売当初の広告

ルームもあり、車重は 475kg と軽量で、販売価格は当時の常識を大きく下回る 31.3 万円と発表された。

N360 は発売されると同時に、若者を中心に注文が殺到した。1967 年(昭和 42 年)2 月から配車を開始して僅か 3 ヶ月目の 5 月には、早くもスバル 360 に替わって、軽自動車販売第 1 位となり、以後 44 ヶ月、通算では 83 ヶ月に渡って国内軽自動車トップの座を占めることになった。さらに N360 は、ユーザーの多様なニーズに対応するため、次々にバリエーションを拡大した。高性能な 36 馬力エンジンを搭載したモデルで、モータースポーツの分野で活躍。また独自の 3 段オートマチックを採用し、加えて豪華モデルの投入によって大衆化をはかり、今まで軽自動車に関心なかった人たちからも大きな支持を得たのである。

N360 の後継モデルとして、1971 年(昭和 46 年)に水冷エンジン搭載のホンダライフが開発されることになるが、このライフシリーズを含めたホンダの軽自動車の生産台数は 8 年間で約 125 万台が販売され、日本の自動車業界に様々な革新を起こす結果となり、自動車の本格的な大衆化に大きな貢献を果たしたのである。(小林謙一)